
灰空から青空。

一柳 紘哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰空から青空。

【Nコード】

N1635A

【作者名】

一柳 紘哉

【あらすじ】

大袈裟に聞こえるかもしれないけど、世界が緩やかに螺旋状になってしまふような恋をした。

何時もと、いつもと同じだったんだ。

朝食の内容も。灰色の空も。柔らかいアスファルトも。色がない花も。煙草の斑模様の味も。

でも僕は恋をした。すべての世界が緩やかに螺旋を描き、感じる全てが嘘のように色を変え、吐き出す吐息が辺りを吹き飛ばしていく。大袈裟かもしれないが、それが僕の恋だ。

????????????????????????????????????

授業をさぼって屋上にでた。空は相変わらずの灰色で、特になにも変わらない、いつもと同じような一日が始まった気がした。

足元にある、風雨を浴びぼろぼろになったバレーボールを蹴り飛ばして、荒れた地面の屋上をフラフラと子供の玩具のように歩いていると気分がよかった。

世界が僕だけのものになった気さえした。

錆びてぼろぼろになった鉄柵から校舎の裏を覗くと、予想以上にサボっている人が見え、現実に戻された。

鉄柵にもたれかけ、ポケットから煙草を出し火をつけた。小さなころ父に煙草の煙が空に届いて雲になるんだよと教えられ。友達に自身ありげに説明したら馬鹿にされた。

でも僕はそれを今でも信じている。

ゆっくりと煙を空に吹き出した。やっぱり雲が一つ増えた。

鉄柵に体重を乗せて、一つ増えた雲を眺めて又煙を灰に入れたら、扉が開く音がして、あわてた僕はどうすることもできず、そのまま屋上から落ちてしまった。

壊れてしまった鉄柵が見える。僕の名前を叫ぶ人がある。僕を叫ぶ

人がいる。

僕は重力に逆らわず、肺にある煙を校舎に吹いた。その煙は、空に届いて雲になるのではなく、校舎の窓から好奇の目で落ちる僕を見る彼女の前で雲になった。

まるで雲にのったカミサマのようだ。カミサマ？

地面に落ちた瞬間に、心にも衝撃が走った。すべての世界が緩やかに螺旋を描き、感じる全てが嘘のように色を変え、吐き出す吐息が辺りを吹き飛ばしていくような衝撃が肉体の痛みを凌駕した気がした。

[illegible]

私は、彼から目が離せなかった。まるで眠るような格好で落ちる彼が、なぜか異様に気になったの。まるで眠っている全てのモノタチを揺り動かし。開始のベルを高らかに鳴らす鳥のようだわ。大袈裟かもしれないけどそれが私の彼に対する気持ち。

[illegible]

僕が目を覚ましたらそこは、何時もと違っていた。

なにが？

全部が。

まず僕は病院のベッドに拘束されていた。身動きがとれず、全身に包帯が巻いてあるような気がした。点滴が見える。白いカーテンの隙間から空が見える。

それだけかい？

違う。

世界が不思議の塊になった。

彼女を思い出すと、耳に届く全ての音が僕を高揚させ。目に見える全てが果てしなく尊くなる。

僕は、彼女に恋をした。事故よりも事実としてここにある。

その事実を受け入れたら僕は激しい睡魔に襲われた。

[illegible]

V V V V V V V V V V

僕は空を高く、高く飛んでいる。

何もない広い大陸をどこに行けばいいのかは分からないけど。

地面に彼女が見えて、僕は急いで急降下した。

彼女の肩にとまって僕は話しかける。

初めまして。

「ねえ鳥さん、私はどこに行けばいいの？ここはとても広すぎて、私には分からないの。」

あなたのその大きな翼で飛んで、私の行くべき路を教えてくださいませんか？」

僕は君に聞きたいことがあるんだ。

「ねえ、お願いだから私を救ってくれないかしら？とても不安なの。」

L

君の名前が知りたいんだ。今はそれだけで僕は全てがうまく行く気がするんだ。

「お願い。」

不安なの。

頼れるのはあなたしかないの。

どうして泣くんない？頼むから泣かないでくれ。

僕は彼女の肩から羽ばたいて、彼女の涙を口で受け止めた。

何が彼女を泣かせたのか考えながら空を飛んでいたら、朝日が昇ってきた。

その向こうにある鐘を鳴らせば彼女は泣き止むのかもしれない。だから僕は、急いで朝日に向かった。

体ごと鐘にぶつかっていった。

高らかに気持ちよく鐘の音が吹いた。

彼女のところまで吹いていけ。彼女の涙を乾かしてくれ。

.....

.....

目が覚めたの。そしたらきずいたの。私は彼に恋をしてるって。まるで眠るように落ちる彼に。窓を開けたら、耳に届いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1635a/>

灰空から青空。

2010年12月18日21時24分発行